

げんでん 福井 ふれあい

GENDEN FUREAI FUKUI

2004 第18号 SPRING

野
坂
大
神



- 15年度^{げんでん}_{ふるさと}文化賞・芸術新人賞
受賞者の横顔
- 越前陶芸村 福井県陶芸館訪問
- 第6回ふるさと大賞写真コンテスト
入賞作品紹介
- ^{伝統行事}_{シリーズ}加茂神社上宮の神事(小浜市)

- 平成15年度げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞 橋頭紹介 P2・3・4
- 福井県陶芸館訪問 P4・5
- 第6回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品紹介 P6・7・8
- 伝統行事シリーズ・加茂神社上宮の神事 P9
- 福井の文学碑 橋頭寛ゆかりの地の歌碑を訪ねて P10
- 敦賀市立博物館所蔵逸品絵巻 誌上展(原在中軍「龍圖」) P11
- 人間国宝の狂言を鑑賞 狂言をどう見た…中学生の感想 P12
- 情報ファイル(平成16年度財団事業計画と予算など) P14・15

表紙の紹介

福井県指定無形民俗文化財

野坂だのせ祭り(敦賀市)



敦賀市野坂区に鎮座する野坂神社に、室町時代から受け継がれてきた伝統芸能「だのせ祭り」(福井県指定無形民俗文化財)が今年は2月8日、午前中 同神社でお供えの神事などが行われ、午後、野坂公会堂で伝統の踊りが奉納されました。

会場には、保存会員や小学生らが参加して、田植えなどを表現した田遊びの踊りを威勢よく披露しました。

表紙の踊りは、田植えの儀式を模した舞で、8人の男衆が青葉杉を早苗に見立てて両手に持ち、太鼓を囲んで体を押しつけるように田植えの格好をとり、太鼓のバチに合わせて勇壮に踊る姿をとらえています。

中瀬(文化運動)・竹内(演劇)・藤井(児童文学)3氏を顕彰

松田(工芸美術)・林下(洋舞)氏に新人賞

第5回 げんでん ふるさと文化賞 芸術新人賞



げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞表彰式

財団では、2月7日(ふるさとの日)、第5回(平成15年度)げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞の表彰式を原電敦賀地区本部会議室(敦賀市本町2丁目)で行いました。前川財団理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰盾を贈り、栄誉をたたえました。受賞5人の方の横顔を特集しました。

中瀬さん

郷土芸能を愛し 市文協に活力

中瀬さんの自宅応接間には、平成13年春、叙勲の栄に浴された勲記と勲章(勲5等瑞宝章)が大きな額に収められ飾られています。敦賀市議会議員4期、平成元年には、市議会議長を務められるなど永年にわたる地方自治の功労が認められたものです。

今更、財団のふるさと文化賞では、と遠慮しながらお伝えすると、「郷土を愛する身近な文化への取り組みを認めても



松島さし踊りの音頭をとる中瀬さん(右)＝敦賀市松島町会館

「後世へ残すには、その良さを知ってもらうことが大切。今後も踊り継がれるよう活動したい。」と保存活動への強い意欲を伺うことができました。

敦賀市文協の会長歴10年の思い出についても「文化協会が変わる」のではなく、「文化協会を変える」ことが大切。自分らの会は、自からの手で、足腰の強い会にしようというのが私の信念でした。

行政依存から独立、自主運営への改革のため、積立基金の創設や、相互の文化活動の連携や条件整備の道筋をつくったことなど中瀬さんが手がけた文協の活性化は、市の文化祭や新春のつどいの中にも賑々とうけ継れ、その熱意と功績は高く評価されています。



高校演劇連盟委員長時代に発刊した「福井県の高校演劇40年」。編集委員長を務めた「文化ハンドブック・演劇編」

竹内さん

人との交流を通して
文化の創造を

竹内さんは、昭和29年、敦賀高校に赴任、以降、福井商業、羽水、鯖江高校と38年間、それぞれの勤務校の演劇部顧問として、部活動の活性化に抜群の指導力を発揮されました。同55年には、第3代の高校演劇連盟委員長に就かれ、平成2

年、昭和22年からの福井県の高校演劇活動史をまとめた「福井県の高校演劇40年」を編集発刊しました。高校退職後も、フリーの俳優として、県内劇団に客演公演したり、子供劇の監督に当られるなどアマチュア演劇界の振興に自から参加することで、そのレベルを高めてこられました。また、昨年は県文化振興事業団発行の「文化ハンドブック・演劇編」の編集代表として、本県演劇文化の盛衰や活動団体(個人)の情報をまとめた小冊子を刊行。身近かな芸術文化への参加を呼びかけてこられました。竹内さんに、「今日までの文化・芸術活動で最も大切にしてきたものは」とお聞きすると、「人間を大切にし、人との交流を通して文化を創造していくことが私の信条です。」と語ってくれました。

ふるさと文化賞

受賞者の横顔



中瀬 実氏
(文化運動)

昭和34年から21年間、松島さし踊り保存会会長をつとめ、博士の伝統芸能の保存普及に尽力。同55年から敦賀市文協の総務を兼任、平成5年から10年間、同会会長として民間主導の自主的文協活動の推進に力を注ぎ、先進的な文化運動の活性化に顕著な功績を挙げ、同10年度県文化功績文化功労賞を受けるなどふるさと文化の振興に大きく貢献しました。



竹内 成博氏
(演 劇)

昭和29年福井大学卒業後、38年間、県内勤務高校の演劇部顧問として生徒指導に尽力。中野日本文学大会に県代表として参加し、同大会で賞状など高校演劇活動に指導的役割を果たす。平成2年「福井県の高校演劇40年」を編集発行。退職後、県演劇連盟の顧問に就き、初代事務局長、同連盟会長として県内アマチュア演劇界の活性化に大きな指導力を発揮されました。



藤井 庸行氏
(児童文学)

昭和32年福井大学卒業後、38年間、県内小・中・高校の国語教師として勤務。子供たちに本を読み聞かせる活動に力を注ぐ。県内の時評、児童文学誌に作品を多数発表。昭和57年以来、福井、今立、丸岡、小浜の童話サークルを育成。その間、全国コンクールに多くの受賞者を送り出すなど県内児童文学界の発展向上に尽すなど福井のふるさと文化の振興に貢献しました。

藤井さん
「心に太陽を」
童話の世界を普及



童話の世界をしみじみ語る藤井さん＝仁愛女子高図書室

仁愛女子高校の非常勤講師として教鞭を執っておられる藤井さんを訪ねました。早々、児童文学にとりつかれたさつきかけをお聞きすると、大学を卒業後、最初に

また、小、中、高校の3つの学校に定年まで勤めることができ、常に子供たちに「本を読み聞かせる」運動に一貫して実践できたことを幸せだったと語り、そして、子供たちが一番好きなことは「遊ぶこと」「食うこと」さらに「話を聞くこと」だと知りました。

苦しいことや悲しいことがあっても常に「心に太陽を」「口びるに歌を」の心を持って生きることが大切だと訴えてきました。

地域活動では、福井童話サークルをはじめ多くの童話グループの育成に努められ、創作童話コンクールに多くの受賞者を輩出していることから、藤井さんの児童文学の創作と普及に寄せる指導力と人生感を知ることができました。

福井に生まれ、福井に育つたことを喜びふるさとをこよなく愛する気持ちを大切にすることこそ、「ふくい」の文化を創造し、継承する原点だと語っていました。

げんでん芸術新人賞

受賞者の横顔



松田 章氏
(漆 工 芸)

武生工業高校卒業後、地元漆工芸作家富田立山氏に師事。昭和60年県展覧、県文協賞を受賞。以来、日本現代工芸展や日展に連続して受賞。若手漆工芸作家として、越前漆器の伝統を継承し、現代センスを加味し、創造性あふれる作品を発表。平成2年県展覧無鑑賞賞を受賞。同15年、日本現代工芸協会委員。越前漆器界にあって、若手のリーダーとして、今後の活躍が期待されます。



林下 幸世さん
(洋 舞)

昭和50年、3歳よりバレエに入門。平成3年丸岡高校卒業後、山形福美子・神村和雄(東京)に8年間師事。この間、日本バレエ協会の公演に数多く出演。全国舞踊コンクールに多くの入賞を挙げ、上位奨励賞3回。平成11年、フクイバレエ団教師。同12年、丸岡研究所を開設。後編の指導にもあたり、ふくい県民文化祭には毎回主役を演ずるなど有望な舞踊家として活躍が期待されます。

古窯のふるさとに、早春の気配漂う2月下旬、越前陶芸村の拠点施設「福井県陶芸館」を久し振りに訪ねました。

昭和の後期、何度かこの地を訪れましたが、今回の訪問では、越前古陶とその再現に接したり、陶芸村の変遷をみて、土と炎の里に新しい息吹も感じる見学となりました。

古窯のふるさと
越前陶芸村

福井県陶芸館訪問



土蔵風の福井県陶芸館正面

日本6大古窯の一つに数えられる越前焼の歴史や文化を学び、伝統産業の陶器づくりを活性化させ、県内外の多くの人に焼物に触れ合う場を作ろうと、30数年前、当時の福井県知事の中川平太夫氏の発想で、越前陶芸村構想がつけられました。

まず、その拠点となる施設として、昭和46年（1971）福井県陶芸館が開館。当館の特色は、越前焼の歴史や古陶を展示し「見せる」資料館を中心に、陶器づくりに取り組み「作る」陶芸教室、造りあげた器で茶事を味わう「使う」茶苑、訪れた人が「憩う」



古越前が伊らりと並ぶ第1展示室

日本庭園（園石庭）の四つの機能を組み合わせたユニークな文化資料館として発足しました。

資料館の前には、約12・5mに及ぶ陶芸公園が昭和55年（1980）に

交通アクセス



開館時間 午前9時から午後4時まで
休館日 ●月曜日（休日を除く）
●休日の翌日（土・日・休日を除く）
●年末年始（12月28日～1月4日）

完成。

陶器や金属を素材とした有名作家の彫刻群が展示された陶影広場、緑の芝生公園や備し広場などが広がり、毎年5月に開かれる越前陶芸まつりのビッグイベントと合わせて多くの人々で賑わっています。

松田さん 工芸の表現 多種多様 その素晴らしさを伝えたい



珧漆「花瓶」の漆の下塗り作業に取り組む松田卓氏

鯖江市西袋町にある松田さんの工房を訪ねました。工房は父親の松田宝仙さんの自宅に併設され、卓さんは、父親が開発したという「珧漆」作りで、花瓶に漆の下塗りをする作業に励んでいます。

卓さんがこの道に入ったのは、子供の時代から父親が漆芸家として、日夜研究に没頭し、新しい特技を生かした漆器作りにも動かし姿を見て育ったことが今日の私があると思っていますと語り、「漆工芸のやりたいことをするために、今なにをすべきか、常に考え、努力することが私の信念です。」と工芸に取り組み力強い言葉をうけたまわりました。一方、お父さんからは「息子からは、若いグループから吸収してくる新しい手法の作品に習うことが多いです。」と卓さんの現代センスを加味した作品づくりに大きな期待を寄せていました。今後の抱負をお聞きすると、「工芸という小さな世界だが、その表現法は多種多様、それぞれに素晴らしきものです。その素晴らしさを少しでも多くの人々に伝えていきたい。」と語っていました。

林下さん 踊る楽しさを 指導したい



県民文化祭に参加し「パキータ」を演ずる林下さん

福井市大手2丁目のフクイバレエ団・研究所で同団代表ノムラ舞子さんも同席され、林下さんとお会いしました。

素顔の幸世さんは、開口一番「正直言って驚きました。しかし、今度の受賞はとても嬉しいです。バレエ芸術を認めて

いただき光栄で、今後さらに頑張りたい。」と感激と喜びをかみしめていました。

林下さんは、3歳の時からバレエを始めました。そのきっかけを聞くと、姉が踊りが好きで、私もつられて参加するようになったという。お姉さんは現在、劇団「四季」に所属、主役で活躍中の林下友美さんで、「姉妹揃って、この界に御光を浴びるまでに成長した証でしょう」と2人の指導に係ったノムラさんは、当団の宝ですと、絶賛していました。林下さんは、高校卒業後、東京の山路瑠美子バレエ研究所で8年間修業。全国バレエコンクールでは、数多くの上位奨励賞などを受賞しました。

彼女に今後の抱負をたずねると「沢山の人がバレエを知ってほしい。子供の頃より踊る楽しさを、中、高校生では、精神力や感受性を身につけてほしい」と指導者としての熱意も燃やしていました。

越前焼の歴史

今から850年前の平安時代末期に、宮崎村小曾原の丘陵に最初の窯が築かれたのが越前焼の始まりです。この最初に作られた窯の構造や焼かれた壺・甕・すり鉢などの特徴から、東海地方からこの地にはるばるやってきた陶工の集団が初期の越前焼の生産を行ったと思われる。その後、宮崎村・龜田町の丘陵各地に窯を築いて発展してきましたが、室町時代後期になると、長さ25m以上の巨大な窯を大釜窯と呼ばれる平等村現・龜田町平等の集落から少し離れた丘陵の1ヶ所に集めて大生産基地を作りあげました。この丘陵で焼かれた越前焼は、北海道から島根県までの日本海沿岸に住む人々の元

に運ばれていきました。しかし、江戸時代中期になると、窯は平等村の集落近くへ移り、生産量も縮小して行きました。当時の古文書によると、平等村の人々は燃料の薪や粘土と呼ぶ粘土を集めるのに大変苦労していたことが伺えます。明治に入って、信楽や瀬戸などの先達地から陶工を招いて食器や花瓶作りなどを始めました。また徒弟養成所を作った後継者の育成に努めてきました。越前焼の歴史の中で、先人達の努力が実り、昭和1年(1926)には通産大臣より伝統的工芸品の指定を受けるまでになりました。

炎ジョイ in 越前陶芸村



越前双耳壺 室町時代 高さ42.7cm

九右衛門窯 越前古陶とその再現

周辺には、高度技術の指導・研究や後継者育成のための県産業指導所、ギャラリーや大ホールなどを備えた「越前陶芸村文化交流会館」、陶器を展示・即売する「越前焼の館」や各種イベント会場となる花みずき「炎ほの館」などが配置され、しばらく来なかった間この村の充実ぶりに目を見張るものがありました。

第1展示室に入ると、中央部に当館所蔵の逸品といわれる「越前双耳壺」と出会います。「この壺は、平成13年9月5日から12月2日まで、イギリスの大英博物館で開催された文化庁主催の展覧会「古代日本の聖なる美術」に日本を代表する「やまもの」として出展された有名な美術品です。」展示室には、この地方の越前窯で焼成された壺、甕、播鉢が平安時代後期から鎌倉、室町、江戸時代と時代の推移を追って多数展示され、古越前の歴史とあわせて、先人達が土と炎との語らいの中に

素朴な美を追求した古陶の形姿に、不思議な魅力を感じながら見学することができます。

2階の展示室では、越前焼研究家水野九右衛門氏(1921~1989)が40年以上にわたって収集された越前焼をはじめとする膨大な窯業資料を遺族からご寄付

をうけ、この志をうけついで、記念室を設け、公開しています。

和室の畳間には、九右衛門窯で焼かれた多くの壺、甕、播鉢が穴窯に模したかたちで並べられています。



膨大な窯内窯業資料が陳列されている水野九右衛門コレクション記念室

「九右衛門窯」とは、昭和11年に水野九右衛門氏が実験考古字用に復元した鎌倉時代の穴窯です。水野氏は古越前の研究を越前窯の再現という新しい試みに挑戦し、2回にわたる焼成実験を行いました。不幸にも平成元年9月、志半ばにして急逝されました。水野氏の遺志は地元陶芸家・研究者の人たちに受け継がれ、平成4年に第3回、平成5年に第4回の焼成実験が行われ、見事成功したその成果がここに再現されています。



九右衛門窯で焼成実験された古陶の再現



陶芸教室で作品づくりに取り組む若者たち

陶芸教室

年2万人が楽しむ

陶芸教室では、小・中学生をはじめ年間延2万人の人たちが利用。手ひねりや電動ロクロを使い、やきもの作りに熱中したり、素焼き品に絵や文字を書く作品づくりを楽しむなど人気を集めています。当日は、10数人の若者が作品づくりに取り組んでいました。

茶苑 茶の湯を楽しむ由緒ある



葛知庵と立礼所

茶苑は、48畳の大広間と正式の茶事ができる越知庵からなっています。

昭和55年10月、天童・皇居内閣下(当時皇太子・同妃殿下)が越前陶芸村へご視察時に同庵でご昼食をされた由緒ある茶苑です。

テーマ

21世紀の「ふるさと」の風景



鯉のぼりの泳ぐ姿が勢いよく空に舞う状態が最高に表現されていて、素晴らしい作品になっています。また、水の清い流れもよく、画面構成、光線状態、遠近感、シャッターチャンス等の要素が、写真を上手くまとめている。「ふるさと大賞」にふさわしい作品に仕上がっています。(講評・八木隆)

大賞

「滝のぼり」大岸 二郎 氏

(丸岡町)

第6回「ふるさと大賞」写真コンテスト(テーマ「21世紀の「ふるさと」の風景」)には、応募151人の方々から450点の作品が寄せられました。1月8日、審査会を開き、審査の結果、大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞5点、入選28点、佳作28点が選ばれました。財団では、入賞作品(優秀賞以上)の表彰式を2月7日(ふるさとの日)、原電教質地区本部で行いました。

入賞作品(優秀賞以上)

	作品題名	受賞者氏名	住居
ふるさと大賞	滝のぼり	大岸 二郎	丸岡町
ふるさと賞	一般 仲 真	三上 彰	福井市
	女性 朝もやに咲く	寺尾美代子	福井市
優秀賞	一般 ふるさと川に舞う	知興 浩	名田庄村
	一般 桜の木の下で	辻 弘司	教質市
	女性 華やかな朝に	福井 一佳	今庄町
	女性 菜の花とけいこ	桐谷 和子	福井市
学生	えい い	河野 昌太	武生市

(敬称略)

受賞 大岸さんに聞く



大岸 二郎 氏

Q、受賞作品を撮られたきっかけ、作品づくりの経緯などをお聞かせください。

A、作品の鯉のぼりは、昨春六日町へ撮影に行った折、九頭竜川の支流(旅塚川)で見かけたものです。河原に下りて堰越えに見上げると、山里の青空に鯉が滝のぼりさながらに泳いでいるように見えました。

この地の人たちが子供の成長ばかりか、

ふるさとの発展を願っておられるように思い、広角レンズいっぱい、熱中撮影しました。

Q、財団では、毎年ふるさと福井の自然・歴史・文化などを素材にした写真コンテストを行っています。テーマについてお聞かせ。

A、テーマに、「21世紀」という前提が付いているので苦心しました。しかし、現代の中からこれにふさわしいものを発見し、撮影(記録)し、応募することで活用されていくのは楽しいです。良い、適切なテーマです。

Q、受賞を機に、今後の抱負をお聞かせください。

A、このコンテストで、テーマを迫って作る写真の面白さ、奥深さを学び、受賞が励みになりました。今後はこの経験をもとにさらに鑑賞に値する作品づくりに努めたいと思います。



2月7日(ふるさとの日)に行われた表彰式

審査総評

21世紀の「ふるさと風景」という今回のテーマに450点と多くの写真が寄せられました。6回目ともなりませんが、課題の「ふるさと風景」に対して、ほぼ1年間じっくりと取り組んだ方が多く見られ、レベルの高い作品が多数集まったように思われます。

各撮影者のテーマに対する考え方の違いが、写真に独特の個性をもたらし、すばらしい仕上がりとなっております。特に、上位入賞者の作品は顕著に表れていました。惜しくも入賞を逸された方は、ここでもう一度、「福井県のすばらしい自然、歴史、文化等の地域資源を生かし、ふるさとの意識を高め、「ふくい」の美術・文化を育てることを目指す」「ふるさと大賞」写真コンテストの意義を認識いただき、作品の意図、主題、モチーフの表現力を磨いていただければと思います。

次回も「ふるさと」の心を大切にしてください。(八木隆)

ふるさと賞



鶴が川に餌をとりに来た風景でしょうか。多分、兄弟か、仲間だと思えますが、よくとらえています。先ずよいのは色のバランス、すずきと川の色が見る人に感動をあたえる魅力的な作品になっています。今回のテーマ「21世紀のふるさと風景」に合った完成度の高い秀作です。(講評・水谷内健次)



森の神秘性を写し取るのに、かなりロケーションを重ねたにちがいないと思います。こういう被写体では通常、もっと木々の立ち並ぶ場面にレンズを向けるものですが、全体に空さを持たせながらしっかりと構図に仕上げています。特に左へ奥へ続くそれが、写真に深味を与えています。また、ピントの置き方も上手で、目線のしっかりとした写真です。(講評・谷口恒夫)

一般の部 「仲間」 三上 彰氏 (福井市)

女性の部 「朝もやに咲く」 寺尾美代子氏 (福井市)

◆ 審査会委員 ◆

審査委員長	八木 隆	写真家
審査委員	谷口 恒夫	福井新聞社編集局写真部長
	野田 訓生	福井県立美術館学芸員
	水谷内健次	写真家
	三好 勝巳	フジカラー北陸(株) 福井事業部営業部長
	前川 剛夫	当財団理事長

(敬称略)

佳作	入選
学主 出日定雲 ゴハン(まだ)うっ 女子 藤夜に咲く おしちまな雀 藤江の子供達 光のシャワー 女子 静寂 トキメキの秋 静寂 心は花のように、 本のおおせや主人 夕日 サウゼットエング 大安寺の庭園 赤石の岩壁 藤江の山と里 杉原を眺めて 早の小道 杜の風情 静寂に咲く 女子 静寂 トキメキの秋 静寂 心は花のように、 本のおおせや主人 夕日 サウゼットエング 大安寺の庭園 赤石の岩壁 藤江の山と里 杉原を眺めて 早の小道 杜の風情	一般 静寂 のぞかれた香 街角 トキメキの秋 静寂 心は花のように、 本のおおせや主人 夕日 サウゼットエング 大安寺の庭園 赤石の岩壁 藤江の山と里 杉原を眺めて 早の小道 杜の風情



「桜の木の下で」 辻 弘司 氏 (敦賀市)

新入学生たちの初々しい姿をとらえた一枚です。学生たちがバラバラに重なり合う様子と、満開の桜の花びらの重なり合いを、同一の枠として併置される構図の冒険が試みられています。直視はあえて窮屈にされていますが、学生を桜の花に例えるという視点は見事に成功しています。

記念撮影を撮るというアイデアもユーモラスです。
(講評・野田訓生)



「菜の花とかけっこ」 熊谷 和子 氏 (福井市)

きっと散歩の途中でしょう。とても気持ちのいい写真で、さわやかにそよぐ風の匂いを感じます。細く長く伸びた二つの影が、この写真のアクセントで、親子が生きたと写し出されています。欲をいえば、ちょっと正面過ぎでした。もう少し左からカメラを向けると真ん中の抜けがなくなり、うんと力強い写真になったと思います。

(講評・谷口恒夫)

優秀賞

一般の部



「ふるさとの川に舞う」 知見 治 氏 (名田庄村)

沢山の蛍が飛び交う、幻想的な世界が描かれています。尾を引いた光や点の光。よくこれだけの数の蛍が生息しているものだと感じます。やはり、水がきれいだからこそ蛍の育ちやすい環境なのでしょう。

撮影も蛍の光と背景の山や川の流れを出しており、シャッタースピードに大変苦労された秀作だと思えます。

(講評・三好勝巳)

女性の部



「華やかな時に」 落井 一枝 氏 (今庄町)

すばらしい色調の写真です。ハスの花の色、葉の色、背景の杉木立ちなど、色と画面構成が、上手く表現されて、写真を見る人を圧倒します。撮影された瞬間をも強く表現されていて、優秀賞にふさわしい作品です。

(講評・八木隆)

学生らしい素直な視線がのびのびと表現されていて好感のもてる一枚です。かけ声とともに表情が最高頂を迎える一瞬が、見事にとらえられています。力強く突き上げられた、本の輪が作り出す形とリズムが、画面に安定と動きを与えており、写真に人物の表情だけに頼らない、造形性をもたらししている点が確かな力を感じさせます。
(講評・野田訓生)



「えい！」 河野 良太 君

(武生工業高校)

学生の部

加茂神社上宮の神事

小浜市

毎年旧暦の1月16日、小浜市加茂に所在する加茂神社で、7種の木の実などを巨木の下に埋め、1年後に取り出して種子の発芽状況を検分し、農作物の豊凶を占う神事が行われます。今年も2月6日、区民や宮川小学校の児童らも参加して、賑かに執り行われました。この神事を地元では「オイケモノ」と呼んでいます。

「オイケモノ」の神事 豊作を祝う

加茂神社は、村を縦断して流れる小北川によって上社と下社に分かれています。下宮は一間社流造りの本殿と拜殿を配置した神域で区画され、一方、オイケモノが行われる上宮は、小北川の対岸、東方百廿上手にあり、照葉樹林の社叢のなか

ほどに、木造の小さな鳥居と石積みとで区切られた禁足地があり、いわゆる社殿をもたない神籬の神社です。

神社の由来は、靈龜2年(716)大和國葛上郡鴨都波八重事代主命が、根来谷白石(小浜市)を経て加茂の地に鎮座した由緒をもつといわれています。

この加茂社で、古来より上宮の神事と称され、「オイケモノ」と呼ばれるこの年の占神事は、享保12年正月の「若州加茂社記録」中の「年中行事之次第」に詳しく行事の内容と次第が載せられています。その起源は、上宮が鎮座した8世紀初頭に遡るとみられています。

2月6日、現地で神事の進行を撮って見ました。

午前10時、区長をはじめ宮職代、宮世話、神事当番の神事の諸役が社務所に集まり、神事の準備を行います。区民や児童たちの見守る中で、この日に埋納する儀が行われました。野老、栗、椎、干柿、銀杏、



取り出した木の実を検分して作柄を占う区長ら



上宮に向かう途中、神事当番が行う弓打ちの神事

ついで、御幣持ち、弓矢の順に整列し、上宮に向います。その参進の途中、歩射(三打ち)神事が行われます。弓射ちは、中相場と呼ばれる橋向いの広場で、こもにワカバを吊して射的とし、20メートル手前から3回神事当番が弓矢を射て、豊作を占います。



小浜市加茂は、旧宮川村の入口に位置し野木川左岸の谷間に所在する集落。加茂神社の氏子は、現在、加茂区約50戸、大戸約20戸となっています。



ムクのお老木の下に、昨年埋めた小箱を掘り出す神事

坂道を登ると、上宮の手前の谷川の瀬にマクラガミと呼ばれるシメナワを張った椎の古木があり、かつて人身御供が行われたといわれています。行列がそこにさしかかると「ウワッ」といっせいに大声をあげます。伝説では、昔、このマクラガミを杖にして大蛇がねていたといわれています。

一行が上宮へ着くと、まず神籬を供えて一同が礼拝し、再び弓射ちが行われます。その後、宮職代が「百万石」「百万石」

と大声をばりあげて餅花をまきます。

神座の右方、ムクのお老木下に、積みかさねた石を丁寧にのけて、昨年埋めた小箱を取り出します。そして、今年の新しい箱を安置し、神酒をそそいで埋めもどして祭儀を終えます。

最後は、その後社務所にもどり、区長を上座にして、清洗した小箱を前に一同着座。区長がおもむろに蓋を開いて検分。占象となる芽立ちの模様を調べた結果、標を正して「今年のタネモノは、根、芽とも十分に元気よく、豊作間違いなしです。おめでとうございます。」と判定を報告しました。参加した区民らものそき込んで、伸びた野老芋の根を確認し、吉報を喜んでいました。

ゆかりの地の歌碑を訪ねて



橋曙覽は、福井を代表する幕末の歌人で、国学者です。平成6年、天皇皇后両陛下がご訪米の際、当時のクリントン大統領が歓迎スピーチで「独楽吟」の中から「たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲けるみる時」の一首を引用したことから曙覽の名前が一躍有名になり、広く親しまれる存在となりました。

曙覽は清貧に甘じ、勉学に励むかわらわら歌の道を志し、数々の名歌を残

しています。今回、曙覽ゆかりの地に建立されている歌碑を訪ねてみました。

曙覽は文化9年(1812)福井市の紙商、正玄五郎右衛門の長男として生まれました。

幼学の地に歌碑(妙楽寺)

2歳で母親を、また15歳で父親を亡くし、少年時代、母の実家(府中)武生で過ごしました。両親の死で、仏門に入ろうとして、南条町西大道にある日蓮宗妙楽寺の明導上人から漢学、詩歌などを学びました。これが曙覽にとって学問の道への出発でした。同寺の境内には「橋曙覽先生幼学之地」と題した石碑があり、その横に歌碑(左掲の歌碑を刻む)が建てられています。「山中」



橋曙覽先生幼学之地

独楽 鳥の轉り 水の音
流れたる 小舟 雲かから松

山中



妙楽寺の山門



と題した、すべて名詞を並べた珍しい歌です。自然を友として学問に親しんだ姿を偲び、選歌したといわれ、同寺第44世三井龍明師が昭和45年に建立しました。

弘化3年(1846)曙覽は、家業、家業を興母弟宣に譲り、足羽山の愛宕坂、黄金舎に隠棲しました。嘉永元年(1828)

「葉屋」宅跡の庭に歌碑



48)には、友人や弟子たちの計らいで、現在の福井市照手2丁目(旧)に家屋を新築、そこに転居して「葉屋」と称しました。曙覽は、ここで21年間、57歳でこの世を去るまで、家族と共に暮らし、学問と作歌に傾注しました。

慶応元年(1865)、福井藩主松平春嶽公が野遊びの途中にここに立ち寄り、「志潔夫(志潔)」と改めるよう言い残した逸話が残っています。

曙覽は一度大火に会い、その後新築されましたが、当時、この地は街の郊外で、野辺の中の一軒家、家屋の北の3畳間の壁ざわから音が生えてきたという、良寛の五合庵の生活が思い出されます。昭和23年、この地を訪れた歌人結城衣華が、かつての逸話から選

福井市内 曙覽ゆかりの地



歌した「懐けるばかりもあらぬ興屋を竹にとられて身をすほめをり」を刻んだ歌碑が宅跡の庭に建てられています。

愛宕坂に遺墨の碑



春のはしのの古事記と聞きた
はるにあげて先ふる言も天地の
はしのの時と読ふいづるかな

曙覽

右の歌碑は、昭和43年(1968)8月、福井県短歌人連盟が明治維新百年、曙覽没後百年を記念して、福井市足羽2丁目、愛宕坂、黄金舎跡に近い前・福井市郷土歴史博物館の前庭に、曙覽の有名な遺墨の和歌が刻まれています。

敦賀市立博物館所蔵
逸品絵画誌上展

13

敦賀市立博物館では郷土にゆかりのある作家や団体の関係などつながる歴史絵画を系統的に収集しています。

龍 図 一 幅 原 在 中 筆



絹本墨画金彩

・縦133、5 横85、8 cm
・江戸中期
・落款 八十五翁原在中画
・印章 「原致遠印」白文方印
「子重」白文方印

解説

本図は逆巻く波頭を分け、海中から全身を現した龍が、四肢の爪で岩盤を掴み揺るぎなく、両眼は上空を睨んでいるので、今しも雲を呼び昇り龍となる瞬間を捉えています。

主題の龍は、インドを始め中国、欧州諸国で古代から棲息していたと信じられていた想像上の動物ですが、わが国においても仏教守護の天龍八部衆の一つであり、また縁起のよい瑞獣、立身出世の象徴などがあって好龍画となっています。

この図は龍の姿態を暢達な筆致で描き、鱗も定まった連筆で克明に捉え、鬚・爪などの要所には金泥をもって括っています。また波頭の飛沫の描写も確實で、墨雲の濃淡にも破綻がないのは、中国元明絵画を研鑽した証左でしょう。

在中は華麗なる写生画を得意とする画家ではありますが、本図のように水墨画の分野にも優れた手腕を発揮していることがわかります。

原在中は名は致遠、字は子重、臥遊とも号しました。出生について諸説があり、若狭小浜の藩主・酒井家の奥医師にかかわる藩胤説が有力で、父は性蘭と称したといわれ、生年は、寛延3年(1750)と推定されています。

師承は、狩野派の画家・石田密汀に学んだといわれ、山本探淵、円山応挙にも師事したともいわれています。

天保8年(1837)86歳で死去。

人間国宝の狂言を鑑賞

03
11/13

茂山千作師一門敦賀公演

財団では古典芸能の良さを味わってもらうと、人間国宝の茂山千作師一門を招き、「狂言を鑑賞する会」（日本康復協議会）を11月13日、昼と夜の部に分け、敦賀市プラザ舞臺の能楽堂で開催しました。

この会は、毎年度開催しており、財団創立以来6回目。体験学習の一環として、昼の部に参加した敦賀市の中学生に、生の狂言を鑑賞した感想を聞きました。



酒場の騒がれ後悔の感じ、
男（千作師）の「おどろおどろ」
「真鶴」の一場面

昼

敦賀の中学生 生の狂言を体験学習



千作師（中央）の円熟した演技で笑いを誘う「真鶴」結着の場面



「二人大名」一召使いの男に太刀をふりかざされ目のままにされる二人大名

昼の部では、栗野、松崎、愛発の3中学校から約500人が参加、大蔵流茂山一門による狂言を鑑賞しました。

公演に先立ち、狂言師茂山宗彦さんから狂言や能舞台の由来をはじめ、狂言の小道具「扇子」や「腰刀」などの使い方、狂言の泣き声や笑い方を演技で披露。上演2曲のあらすじが解説された後、「椿山伏」と「附子」が演じられました。

「附子」は主人の留守中、「附子（狂馬）」といわれた桶の中は、実際は黒砂糖で、留守をあずかる2人の冠者は、これを平らげてしまいます。その言いわけに主人の大切な家宝を壊し、そのお詫びに附子を食べて死のうとしたと言いつけまします。この狂言は小学校の教科書にも登場し、トンチ話にもなっているお馴染みの名曲で、役者の滑稽なしくさの連続に会場から思わず大きな笑い声が沸き、大きな拍手が送られていました。

夜

千作師円熟の 演技に堪能

公演に先立ち、狂言師松本薫さんから狂言の歴史や狂言が喜劇として庶民の生活とともに親しまれてきた由来について解

説が行われ、「二人大名」「真鶴」「薬」の3曲が演じられました。

「二人大名」では、2人の大名が連れ立って都へ上京中、通り掛かりの男に、前半威張っていた大名が、後半立場が逆転し、下克上の社会を風刺した滑稽な舞台展開に大きな笑いを誘っていました。

「真鶴」では、興役に茂山千作師が登場。酒飲みのおとと酒乱に呆れた妻、酒の酔いに冷めた男が妻を取り戻そうと、興と夫と妻の葛藤の場面を面白く、可笑しく、言



病人の弟に薬の毒いれた精と懸命に祈禱する山伏と兄弟「薬」の一場面

奇る振舞いやセリフに会場から大きな笑いが沸き起り、千作師の円熟した演技に終始大きな拍手が送られました。

最後に、茂山千五郎さんらが登場して「薬」を上演。兄が弟の病氣快復に山伏の祈禱を依頼。山伏が祈禱を始めると、病人の弟は奇妙な鳴き声をあげ、薬が毒いた精と、懸命に祈禱を上げますが、快方どころか、全員が薬の鳴き声に収束してしまいます。登場する3人の役者は、持前のコミディカルなセリフや演技で笑いのフィナーレを飾りました。

「狂言」をどう見た…中学生の感想

いつの時代にも

笑いがでる狂言に感銘



愛 発 中
3年
西村敬久君

狂言というと、難しいとかおもしろくないとか、かたいというイメージを以前はもっていました。でも中一のとき初めて本物の狂言というものをじかに見て、おもしろい喜劇なんだと知ることができ

ました。だから今回は中三になって、以前よりは少しだけ知識をもって見る事ができたので、前回とは違った観点からおもしろさを感じる事ができました。僕の学年では、小学生のときに、狂言を文化祭でやっていたので、その表現の難しさやおもしろさをみんなに伝えることは本当に大変でした。でも狂言の役者のみなさんは、泣く、笑う、おこる、おどろくなどの感情を表すのが非常にうまく、また動きもとても上手で、「やっぱうぶ口は違うなあ」ととても感動しました。難しい言葉もあったけど、それ以上に、いつの時代になっても笑うことができる狂言は、やっぱりすごいと思ったし、とてもいい経験ができたので本当に良かったです。

初めは難しいと思った
が最後には面白かった



栗 野 中
1年
山岡礼奈さん

私が、狂言教室を終えて一番心に残っているのは、一つ一つの動作が、とても大きかったです。笑っている時や、泣いている時、柿を食べている時は、特に今と全然違う動作で、おもしろかった



■柿山伏

修業帰りの山伏が空に耐えかね他人の柿の木に登って無断で柿を食べ始める。それを見つけた地主は、わざとからかってやろうと、山伏を猿や鳥、畜に見立てる。

正体がばれてはならじと山伏は次々と囁き声を真似るが、「畜ならば羽を伸ばして鳴くものだ」と嘲してられるうち、ついにその気になって高い木から飛び降りて地面に落ち、したたかに腰を打ってしまふ。ふだんは権威を振りかざしてばかりいる山伏にちよつとお灸をすえるのが題目。

し、新鮮に感じられました。

最初は、なかなか話が理解できず、少し難しいと思っていたけれど、ところどころ聞かえてくる現代の言葉遣いや、演技をしている人の表情を見ていて、だんだんと話の内容がつかめてきて、最後には、おもしろかったと思えるような、狂言教室になりました。

狂言をみるのは初めてだったけど、話の内容も分かったので、十分に狂言を楽しむことができました。数少ないこういう経験ができて、本当に良かったです。

おもしろかった

狂言を楽しむ会



松 陵 中
1年
増田みづ稀さん

私は初めて生の「狂言」を見ました。はじめ、狂言って聞いたときは、おもしろいかなと、思いました。

公演の前の解説をきき、本当に見て、おもしろかったです。まさに、舞台の床をたいたいのには、びっくりしました。それにほとんど道具とかもおいてないのに、本当に道具があるように思えました。道具を代用品として、そのつもりであらわしたり、道具を使わずに、あるつもりで表現したりする役者のえんぎに感心しました。

それに、2、3人の少ない人数で、このようなことができてすごいと思いました。あと、急いで歩くところが、上半身だけ動いていない、すり足で歩くことに気づきました。また、しゃべり方も、昔のことはでぜんぜんちがったけれど、おわりまでみてとても楽しく狂言を見られました。



「狂言を楽しむ会」に集まった中学生=プラザ萬家能楽堂

第4回 日英小学校絵画交流展

12/6-14
16-25

「くらし」を題材に90点を展示 **敦賀**

初日、伝統楽器バグパイプを披露



スコットランドの伝統楽器バグパイプを披露

財団では日本とイギリスの小学生絵画交流展を原案、BNFL社と共催で、12月6日から14日まで敦賀原宿子館で、同月16日から25日まで、げんでんふれあいギャラリー（敦賀市本町2丁目）などで開きました。

作品展には敦賀市の4小学校（栗野南、中野、黒河、栗野小）から40点、イギリスの西カンブリア地方・セ

ラフィールド近郊の5小学校から5点が出展。イギリスとの交流展は今年度で連続4回目です。「私たちのくらし」をテーマに、日本側では、敦賀の夏祭りや風船など、イギリス側では家庭の様子やスポーツ活動を紹介した楽しい絵が目立ち、訪れた人の人気を集めていました。

交流展の初日には、作品を出展した敦賀市4校の小学生、保護者をはじめ、BNFLジャパン社長、市教委、学校長ら約百名が出席して開幕のセレモニーを開きました。関係者の挨拶に続いて、イギリスの紹介や、11月にイギリスで開かれた両国絵画交流展のビデオレターが上映され、友好・交流の輪を深めました。

アトラクションでは、スコットランドの伝統楽器バグパイプの奏者山根篤さん（東京バグパイブバンド代



絵を出展した児童や家族が参加して開かれた絵画交流展＝敦賀原宿子館

表を担ぎ、異国風独特の調べでスコットランドの子守歌や日本の「赤とんぼ」などが演奏されました。途中楽器や出演衣装の説明と楽器演奏のチャレンジコーナーが設けられるなどバグパイプの魅力が紹介されました。最後に、スコットランドの民謡「世の光」のフィナーレで楽しい一刻を飾りました。

平成16年度 財団事業計画と予算決まる

6重点施策で計画を推進



16年度予算案などを審議する理事会

平成16年度の財団事業計画と収支予算は、3月11日に開かれた評議員会及び理事会で決められました。本年度は、第20回国民文化祭を前にして、ふくい文化の育成・支援など6重点施策を柱に、計画の推進を図ることにしています。

予算総額 **9,210万円**

16年度予算は、総額9,210万円重点施策を重点に予算編成を行い、事業費7,460万円を計上しました。財団寄付行為で規定している事業区分による事業費は次のとおりです。

- | | |
|------------------------|---------|
| 1. 地域文化の振興事業 | 1,630万円 |
| 2. ふれあい、ゆとりの創造事業 | 1,120万円 |
| 3. 芸術鑑賞機会の提供・文化創造事業 | 3,230万円 |
| 4. 優れた文化活動に対する顕彰事業 | 600万円 |
| 5. その他の事業（HP、広報誌の発行など） | 480万円 |

6重点施策

- 文化団体等に対する助成事業の充実
- 国民文化祭プレ大会（分野別フェス・）県内高校文化部活動の育成支援
- 人、環境、文化、地域に根ざしたふれあい活動の推進
- ふるさと文化賞、ふるさと大賞写真コンテストなど郷土意識の高揚を図る顕彰事業の定着化
- 魅力ある文化芸術鑑賞機会の提供事業の充実
- 親しまれる財団をめざし、広報広聴活動の推進

ふくい男声合唱祭

迫力の歌声を披露

福井

2/1

「ふくい男声合唱祭」（実行委員会主催、当財団後援）が2月1日、福井市のハーモニホールふくいで開催されました。県内の3グループに加え、石川、富山の合唱団各1グループもゲスト出演し、男声の厚みと迫力に満ちた歌声を響かせました。



熱唱する5つの男声合唱団＝県立商業堂

男声合唱グループだけの合同公演は、県内では初めてで、「フロックス」「X.M.」ダンネリオン」の3グループが相互の交流をスタートさせようと実行委員会を結成して、合唱祭の開催にこぎつけたもの。

ステージは2部構成で進められ、各合唱団によるコーラスを披露。第2部では、参加5団体、130人全員が舞台上より、「富士山」や「花よりすべての人の心に花を」などを熱唱、会場から盛大な拍手が送られました。

第68回かきぞめ競書大会

財団本年から特別協賛

第68回県かきぞめ競書大会(福井新聞社主催、社団法人若狭書道会共催、当財団特別協賛)が、今年も小学生から大学生まで約7万1千余点の応募作品が寄せられ、第1次審査で特選3649点をはじめ秀作、入選作品が選ばれました。

1月24日には、県内13会場で、小・中・高・大学生3233人が課題に挑戦し、かきぞめ席上揮毫が行われました。

書きあげられた作品は、翌25日、山田石雲若狭書道会々長ら会員約百人が審査に当り、書のバランスや正確さ、筆遣いなど厳しくチェックされ、審査の結果、最優秀の大賞に栗川恵理さん(丸岡町磯部小6年)ら4人が選ばれたほか推薦144点、準推薦228点、奨励賞の各賞作品が選ばれました。



県十種(ふ)に参加した小学生たち(右)製菓前小

財団では、学校書道の伝統あるこの大会に本年度より初めて特別協賛することとし、小・中学生の推薦作品の中から11点について財団賞を贈りました。

げんでんふれあい 福井財団賞 受賞のみなさん

- | | |
|-----------------|--------------|
| ふじい のぞみ毛筆・文殊小1年 | 藤井 美乃里宮崎小5年 |
| わかもち いずみ優華・旭小1年 | 小西 麻衣子清水南小6年 |
| 中村 まさき毛筆・園部小2年 | 金本 祐理子小浜中1年 |
| 高はた ゆき穂華・本郷小2年 | 新本 遥加丸岡中2年 |
| 竹内 佳実(大中小3年) | 坂口 裕香南城中3年 |
| 広田 真穂(浜野小4年) | |
- (敬称略)

2/3-15
20-25

第6回 ふるさと大賞 入賞作品展

21世紀のふるさとの風景に

敦賀 福井



入賞作品に見入るカメラファンら
=敦賀市、げんでんふれあいギャラリー=



力作を鑑賞する人たちは福井市
ショッピングシティ「ベル」

財団では、第6回ふるさと大賞写真コンテストの入賞作品展示会を2月3日から15日まで、げんでんふれあいギャラリー(敦賀市本町2丁目)で、同月20日から25日まで、福井市花室南2丁目・ショッピングシティ「ベル」で開催しました。

会場には応募450点の中から選ばれたふるさと大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞5点(関連記事・P6)をはじめ入選と佳作各28点、計64点の作品を展示しました。今回の作品公募のテーマを「21世紀のふるさととの風景」としたこともあり、入賞作品には新世紀に残しておきたいふるさと福井の自然、環境をとらえた風景が目立ちました。

また、伝統行事などに参加する住民の表情や姿をおさめた場面もあり、会場には初日から多くのカメラファンらが鑑賞に訪れ、作品の特色や力作に、じっくりと見入っていました。

福井県新人演奏会

オーディション

2/15
3/14

登竜門に32人挑戦 県立音楽堂

福井県文化振興事業団主催の平成15年度新人演奏会(当財団協賛)のオーディションが2月15日、県立音楽堂で開かれました。

この演奏会は、26年前から毎年行われており、これまでの合格者の中には国内外で活躍する演奏家が育っており、県内在住または本県出身の新人演奏家の登竜門となっています。当日は、ピアノ、声楽、器楽の各部門で32人が参加し、日頃の研鑽の成果を披露しました。



新人演奏家が練習の成果を披露した
オーディション=2/15 県立音楽堂

特に、ピアノ部門では17人が挑戦、ブラームスらの名曲を全身を使って、力強く、情感あふれる音色で独奏。器楽部門では、フルート、バイオリンなどで美しい旋律を響かせ、声楽では、クラシック曲のほかミュージカル「ジキルとハイド」から選曲した参加者もあり、のびやかな美声で歌い上げていました。審査には、本県出身の音楽家小畑実さんら5人の審査員が当り、16人に合格証が授与されました。

3月14日、同音楽堂で、合格した新人演奏家による演奏会が開かれ、オーディションと同じ曲目を披露し、会場からは、若手演奏家に将来を期待する大きな拍手が送られています。

平成16年度財団助成事業を募集 申請期限4月30日(金)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて平成16年度の助成事業を受ける団体を募集しています。

応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を4月30日(金)まで(申請事業の実施が4・5月の場合は3月31日まで)に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは財団にお問合せ下さい。

対象団体の要件

1. 福井県内に活動の本拠を置く団体
2. 構成員(会員)が原則として20名以上の団体
3. 平成15年4月現在で、原則として設立2年を経過している団体
4. 営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5. 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

財政団体の選考・決定

助成団体の選考は、当財団の理事、評議員の中から委嘱された「選考委員会」に諮問し、その答申に基づき助成を決定します。助成が決定した場合は、速やかに申請団体と推薦団体に通知します。

愛読者アンケートご回答のまとめ

げんでん
ふれあい 福井第17号

本誌第17号のアンケートに総数29通のご回答をいただき、ありがとうございました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり、本誌の充実に向けてまいりますので、ご協力をお願い申し上げます。



Q: 第17号で良かった記事は?

- 第4回ふくい県民文化祭開幕 9名
- 「全高総文祭03福井」熱く燃えた高校生の祭典 12名
- 敦賀市中学生イギリス親善派遣帰国座談会 9名
- 福井市愛宕坂茶道美術館とその周辺を訪ねて 18名
- 伝統芸能シリーズ「小浜放生祭」 11名
- デザインマインドコンペティション2003公開審査会 2名
- 福井の文学碑(シリーズ8)紫式部歌碑(武生市) 14名
- 敦賀市立博物館所蔵絵巻誌上展 6名
- 情報ファイル(第7回福祉演芸会外) 5名

本誌への主なご意見など

- 伝統芸能シリーズを保存しているので今後とも継続してほしい。
- 高齢者向きに、文字を大きくしたら。
- 題材に文学的側面の企画を。
- 自分の住む土地を詠んだ短歌や俳句などを掲載しては。
- 編集企画で、少しづつ、広いジャンルの記事を伝えてほしい。
- 県内各地の名産品を紹介してください。

財団イベント INFORMATION

げんでんふれあいコンサート	森山良子&チェン・ミン &アロージャズオーケストラ	4/9(金)	福井市・フェニックスプラザ	入場料 2,000円
文化講演会	講師:岩崎峰子氏(元、芸妓)	4/25(日)	敦賀市・プラザ萬象	敦賀女性ネットワークと共催
ふくい吹奏楽フェスティバル2004	東京佼成ウインドオーケストラによるクリニック・コンサート	6/26(土)	福井市・ハーモニーホールふくい	福井県文化振興事業団・福井新聞社共催、財団協賛
文化講演会	講師:金沢泰裕氏(牧師)	7/3(土)	福井市・福井県生活学習館	福井県連合婦人会と共催
パイプオルガンと奏でる天空の響き	レーゲンスブルク大聖堂少年合唱団	7/24(土)	福井市・ハーモニーホールふくい	福井県文化振興事業団主催・財団協賛



財団ホームページ アドレス <http://www.Genden.or.jp>

(発行) 財団法人 げんでんふれあい福井財団
〒914-0051 福井県敦賀市本町2丁目9番地18号(日本原子力発電(株)敦賀地区本部4階)
TEL.0770-21-0291 FAX.0770-21-9070

「げんでんふれあい福井」第18号
2004年3月発行